初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった外来患者は 28.1 % で、がんでは前立腺 65.3 %・肺 64.4 % から子宮 31.6 % まで開く——受診までの期間は、自覚症状があった人では 24 時間未満と 3 か月以上の両端が真ん中とほぼ同じ厚さ（両端 ÷ 真ん中 0.958）で、なかった人では 1 週間〜3 か月未満の真ん中に集まる（0.350） [M088]

受診までの期間の形 = 両端 ÷ 真ん中 — 分けるのは、自覚症状があったか、なかったか

山岸 勇輝（Yuuki YAMAGISHI）／ Independent Researcher

ORCID 0009-0006-8587-3450

2026 年 9 月 ／ CC BY 4.0

要旨

厚生労働省の受療行動調査（2023 年）の基本集計 第16表・第18表と関連集計 第16表・第18表で、一般病院の外来患者が初めて医師に診てもらった時に自覚症状があったかどうかと、受診までの期間の分布の形を見た。新しい数学定理も新しい法則も主張しない。

第一に、表はそろっている。どの行も区分の和は 100 と丸めの差 0.2 以内で一致する。「受診までの期間」が何から数えた期間か（とくに自覚症状がなかった人）は表の見出しからは分からないので、本稿は期間の起点を解釈せず、分布の形だけを比べる（第3節）。

第二に、**初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった人は 28.1 % で、並べる 14 の傷病の章では新生物の 47.4 % から筋骨格系の 6.5 % まで（7.29 倍）開く。がんの 7 つの部位では、前立腺 65.3 %・気管・気管支・肺 64.4 %・肝・肝内胆管 61.0 % の 3 つが半分を超え、子宮は 31.6 % である**（第4節）。

第三に、ここが本稿の芯である。**受診までの期間は、自覚症状があった人では 24 時間未満（13.8 %）も 3 か月以上（13.5 %）もなかった人（5.6 %・8.0 %）より多く、両端の和 27.3 % が真ん中（1 週間〜3 か月未満）の 28.5 % とほぼ同じ厚さである（両端 ÷ 真ん中 0.958）。**

自覚症状がなかった人では 1 週間〜1 か月未満（25.4 %）がいちばん多く、両端÷真ん中 は 0.350 である（第5節）。

第四に、**両端÷真ん中 は、5 つの年齢階級すべてで自覚症状があった人のほうが大きく、14 の章のうち 13 でも同じ向きで、逆は耳だけである**（第5・6節）。

第五に、両端の中身は章で違う。**自覚症状があった人の 24 時間未満は、損傷・中毒で 49.5 %、循環器系で 22.3 %、呼吸器系で 17.8 % だが、3 か月以上は神経系（21.5 %）・筋骨格系（18.7 %）で多い**（第6節）。

第六に、分けるのは**自覚症状があったか、なかったか**である。同じ「受診までの期間」でも、自覚症状があった人の分布は短い側と長い側の両方に広がり、なかった人の分布は真ん中に集まる。平均の一つの数では、この形の違いは見えない。

射程注記：本稿は新しい数学定理も新しい法則も主張しない——自覚症状の有無と受診までの期間は公開の表にあり、本稿はその分布の両端と真ん中を比べただけである。**本稿は公開の集計データの数の形を述べる構造的解釈であり、医学的な助言・診断・治療の推奨ではない。著者は医師ではない。個人の健康に関する判断は医師・医療機関に相談すること。査読を経ていないプレプリントである。 どのくらいで受診すべきか、受診が早い遅いの良し悪し、検診やがんの見つかり方の良し悪しには立ち入らない。** 受診までの期間は患者が調査票に書いた区分で、何から数えた期間か（とくに自覚症状がなかった人）は表からは分からないので、本稿は起点を解釈しない。自覚症状がなかった割合が傷病やがんの部位で違う理由も、この表では分けられない。対象は一般病院の外来で、「診察・治療・検査などを受ける」ため来院した人である（表の注）。関連集計は、ほかの調査とデータ・リンケージができた人だけで集計している。感染症及び寄生虫症・精神及び行動の障害（本シリーズで保留している分野）と特殊目的用コード、妊娠・分娩・周産期・先天奇形の章、健康状態に影響を及ぼす要因の章は、章ごとに並べていない。**データについて**：受療行動調査（厚生労働省）は e-Stat から取り、政府標準利用規約（第2.0版）に従って使い、本稿の比は、これを加工して作成した。本稿が加えたこと：**受診までの期間の分布を両端と真ん中に分け、自覚症状があった人では両端が真ん中とほぼ同じ厚さで、なかった人では真ん中に集まることを、年齢階級と傷病の章ごとに示したこと、自覚症状がなかった割合ががんの部位で 2.07 倍開くことを示した**こと。

---

1. 記号と問い

- **自覚症状がなかった割合**：初めて医師に診てもらった時に「自覚症状がなかった」と答えた外来患者の割合。
- **両端**：受診までの期間が「24 時間未満」と「3 か月以上」の割合の和。
- **真ん中**：「1 週間〜1 か月未満」と「1 か月〜3 か月未満」の割合の和。

- **両端÷真ん中**：分布が短い側と長い側にどれだけ広がっているか。覚えていない・不詳を除いても同じ値になる。

問い：初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった人はどれだけいて、傷病でどう違うのか。受診までの期間の分布は、自覚症状があったかどうかで形が違うのか。

観察 1.1：M085 は、同じ受療行動調査の組み合わせの表で、外来の待ち時間と診察時間を見た。本稿は、同じ調査の、初めて医師に診てもらうまでの側を見る。

---

2. 下見と設計

正直に書く：設計は表を見てから決めた。

	内容
表	受療行動調査 令和5年 基本集計 第16表（自覚症状の有無 × 病院の種類・性・年齢階級）・第18表（自覚症状の有無 × 年齢階級 × 最初の受診場所 × 受診までの期間）、関連集計 第16表・第18表（傷病分類別）
下見で気づいたこと	受診までの期間の分布は、自覚症状があった人では 24 時間未満と 3 か月以上の両方に厚く、なかった人では真ん中に集まっていた。平均ではなく、両端と真ん中の比で形を比べることにした
下見で気づいたこと（2）	「受診までの期間」の起点を確かめるため厚生労働省の頁の外来患者票（令和5年）の PDF を取ったが、文字の埋め込みが崩れていて機械で読めず、使わなかった。本稿は起点を解釈しない
下見で気づいたこと（3）	はじめ自覚症状がなかった割合は 0〜14 歳がいちばん低いと置いて落ちた（いちばん低いのは 15〜39 歳）
比べ方	自覚症状がなかった割合（年齢・章・がんの部位）、受診までの期間の両端 ÷ 真ん中（総数・年齢・章）

---

3. データと確かめ

計算 3.1 取得したファイル 4 本を SHA-256 で固定し、次を確かめた。

- 4 つの表は令和5年・2023年・単位は %。第16表の注：「診察・治療・検査などを受ける」ため来院した者の数値。第18表の注：そのうち「自覚症状があった」者及び「自覚症状がなかった」者の数値。
- 第18表の列は、最初の受診場所の総数の下に受診までの期間の 9 列（総数・24 時間未満・1〜3 日・4〜6 日・1 週間〜1 か月未満・1 か月〜3 か月未満・3 か月以上・覚えていない・不詳）。
- どの行も区分の和 − 100 は、第16表で最大 0.1、第18表で最大 0.2（丸め）。
- 関連集計には、並べる 14 の章とがんの 7 つの部位（再掲）の行がある。

---

4. 自覚症状がなかった割合

計算 4.1 初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった割合（%）

	自覚症状がなかった	自覚症状があった
総数	28.1	66.3
0〜14 歳	20.7	73.2
15〜39 歳	20.3	73.6
40〜64 歳	30.5	65.6
65〜74 歳	32.8	62.7
75 歳以上	26.7	66.5

観察 4.2：**自覚症状がなかった割合は 65〜74 歳の 32.8 % がいちばん高く、15〜39 歳の 20.3 % がいちばん低い。** はじめ 0〜14 歳がいちばん低いと置いて落ちた（0〜14 歳は 20.7 %）。

計算 4.3 傷病の章とがんの部位（関連集計 第16表・%）

章・部位	自覚症状がなかった	自覚症状があった
新生物	47.4	49.8
内分泌・代謝	45.3	48.2
循環器系	30.6	62.6
眼	22.5	72.8
呼吸器系	16.1	79.6
損傷・中毒	6.8	89.0
筋骨格系	6.5	90.8
がん（前立腺）	65.3	31.6
がん（気管・気管支・肺）	64.4	33.6
がん（肝・肝内胆管）	61.0	34.1
がん（結腸・直腸）	47.0	51.7
がん（胃）	43.6	52.0
がん（乳房）	42.8	55.7
がん（子宮）	31.6	67.1

観察 4.4：並べる **14** の章では、自覚症状がなかった割合は新生物の **47.4 %** がいちばん高く、筋骨格系の **6.5 %** がいちばん低い（**7.29** 倍）。がんの **7** つの部位では、前立腺（**65.3 %**）・気管・気管支・肺（**64.4 %**）・肝・肝内胆管（**61.0 %**）の **3** つが半分を超え、子宮（**31.6 %**）がいちばん低い。 違いが何によるかは、この表では分けられない。

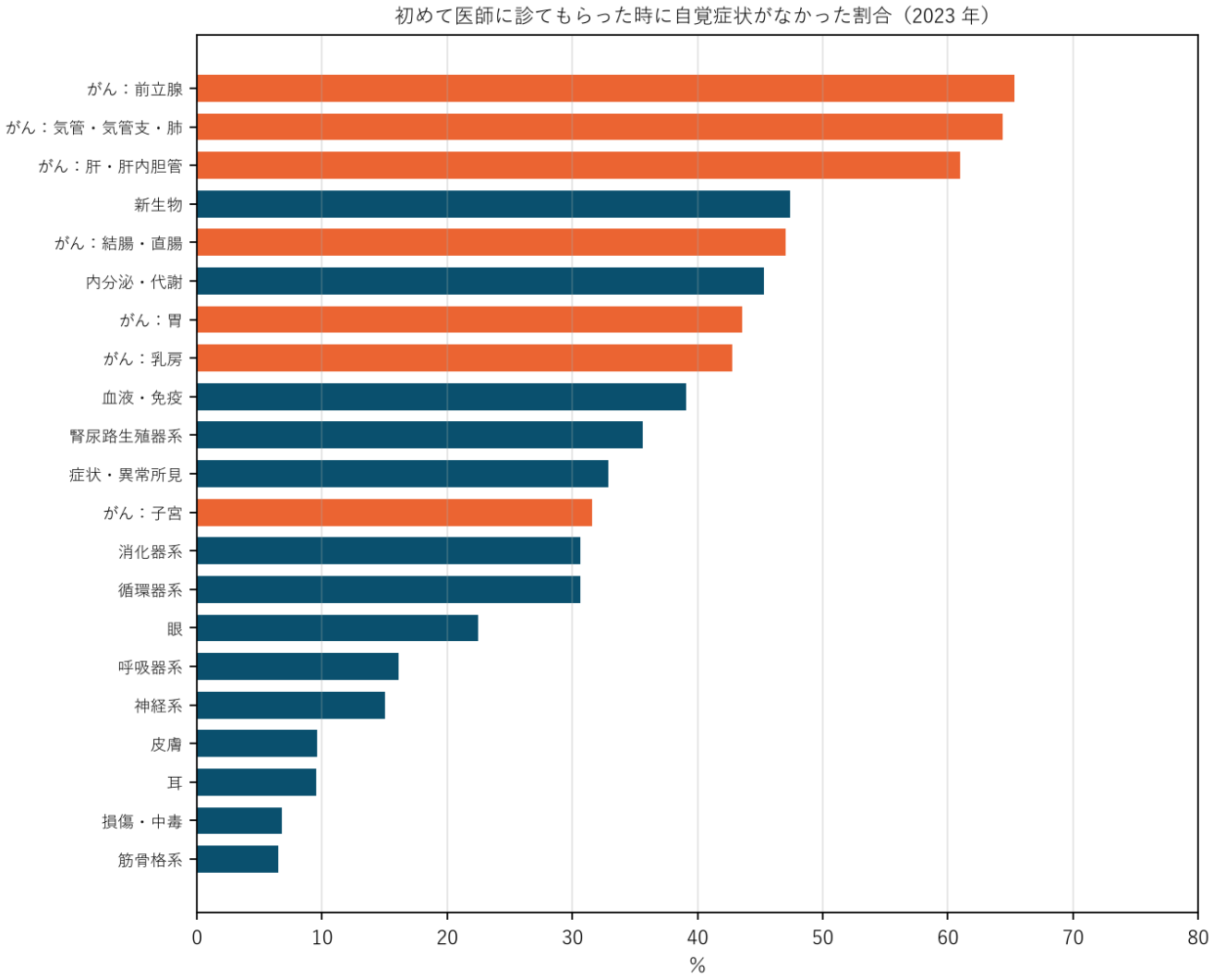


図2：初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった割合（2023 年）。紺が傷病の章、橙ががんの部位。

---

5. 芯——受診までの期間の分布の形

計算 5.1 受診までの期間（基本集計 第18表・総数・%）

期間	自覚症状があった	自覚症状がなかった
24 時間未満	13.8	5.6
1〜3 日	17.7	8.7
4〜6 日	8.8	7.5
1 週間〜1 か月未満	17.5	25.4
1 か月〜3 か月未満	11.0	13.5
3 か月以上	13.5	8.0
覚えていない	12.5	18.8
不詳	5.1	12.6
両端 ÷ 真ん中	0.958	0.350

観察 5.2：自覚症状があった人は、**24 時間未満**（**13.8 %**）も **3 か月以上**（**13.5 %**）も、なかった人（**5.6 %**・**8.0 %**）より多い。**両端の和 27.3 %** は真ん中の **28.5 %** とほぼ同じ厚さで、**両端 ÷ 真ん中** は **0.958**。自覚症状がなかった人は **1 週間〜1 か月未満**がいちばん多い区分で、**両端 13.6 %** に対して真ん中が **38.9 %**、**両端 ÷ 真ん中** は **0.350**（あった人の **1/2.740**）である。 覚えていない・不詳を除いた割合でも、両端 ÷ 真ん中 は同じ 0.958 と 0.350 になる。覚えていない・不詳は、なかった人（18.8 %・12.6 %）のほうが多い。

計算 5.3 年齢階級ごとの両端 ÷ 真ん中

年齢	自覚症状があった	自覚症状がなかった
0〜14 歳	2.064	0.676
15〜39 歳	0.903	0.363
40〜64 歳	0.918	0.333
65〜74 歳	0.889	0.309
75 歳以上	0.931	0.371

観察 5.4：5 つの年齢階級すべてで、両端 ÷ 真ん中 は自覚症状があった人のほうが大きい。 0〜14 歳で自覚症状があった人は 24 時間未満が 29.1 % で、両端 ÷ 真ん中 は 2.064 で、ほかの 4 つの年齢階級（0.889〜0.931）より大きい。

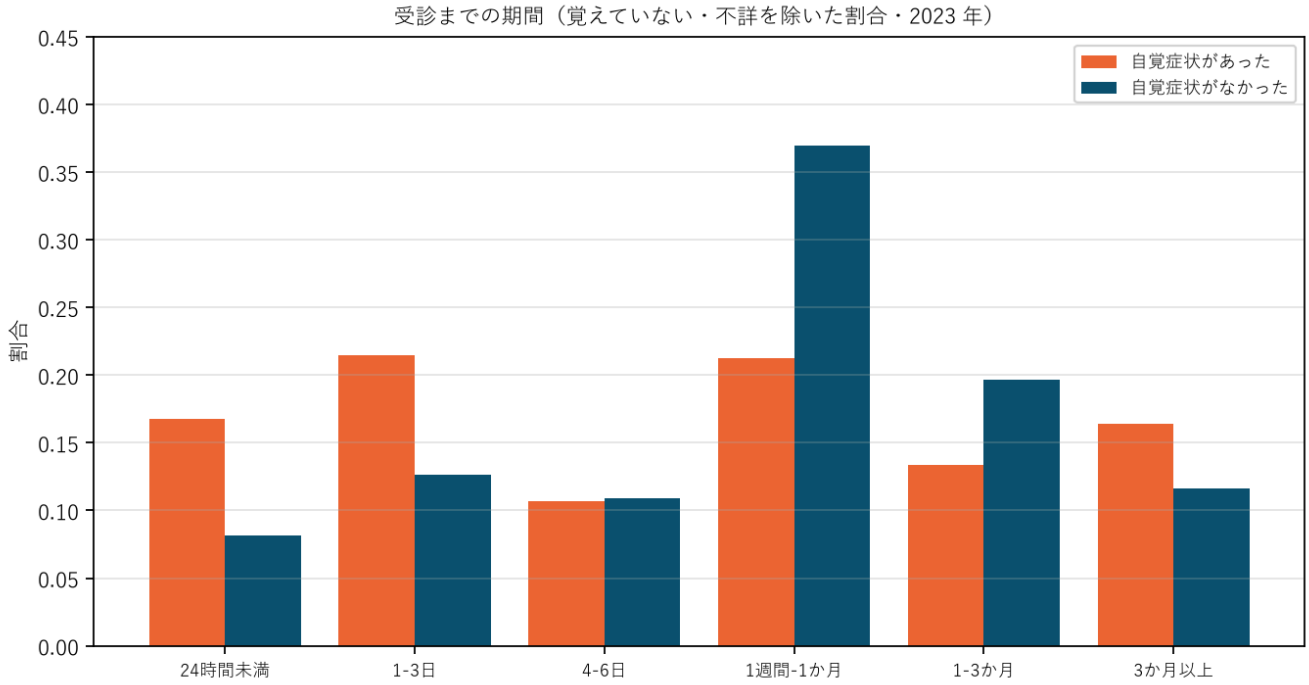


図1：受診までの期間（覚えていない・不詳を除いた割合・2023 年）。橙が自覚症状があった人、紺がなかった人。

---

6. 章ごと

計算 6.1 関連集計 第18表・両端 ÷ 真ん中（章）

章	あった 両端 ÷ 真ん中	あった 24 時間未満	あった 3 か月以上	なかった 両端 ÷ 真ん中
損傷･中毒	4.309	49.5	3.5	1.566
神経系	1.438	13.3	21.5	0.634
循環器系	1.344	22.3	7.8	0.436
呼吸器系	1.302	17.8	8.5	0.377
耳	1.074	12.3	15.3	2.093
消化器系	0.801	11.2	14.5	0.278
筋骨格系	0.775	6.8	18.7	0.361
新生物	0.690	8.3	18.0	0.244
皮膚	0.620	6.6	14.0	0.441

観察 6.2：14 の章のうち 13 で、自覚症状があった人のほうが両端 ÷ 真ん中 が大きく、逆は耳だけである（耳で自覚症状がなかった人は 3 か月以上が 25.2 %）。表は 14 の章のうち 9 つ。両端の中身は章で違い、自覚症状があった人の 24 時間未満は損傷・中毒で 49.5 % と半分近く、循環器系 22.3 %・呼吸器系 17.8 % が続く。3 か月以上は神経系（21.5 %）と筋骨格系（18.7 %）で多い。関連集計の総数の両端 ÷ 真ん中 は 0.990 と 0.353 で、客体の違う基本集計（0.958 と 0.350）と近い。

---

7. 限界

1. **「受診までの期間」が何から数えた期間かは、表からは分からない。** 本稿は起点を解釈せず、分布の形だけを比べた。自覚症状があった人となかった人で、期間の起点が同じとは限らない。
2. 受診までの期間と自覚症状の有無は、患者が調査票に書いた答えで、覚えていない・不詳が 5.1〜18.8 % ある。
3. 自覚症状がなかった割合ががんの部位や傷病で違う理由は、この表では分けられない。

4. 対象は一般病院の外来で、診療所は入らない。関連集計はデータ・リンケージができた人だけの集計である。
5. どのくらいで受診すべきか、受診の早い遅いの良し悪しには立ち入らない。

結び

初めて医師に診てもらった時に自覚症状がなかった外来患者は 28.1 % で、がんの部位では前立腺 65.3 %・肺 64.4 % から子宮 31.6 % まで開いた。受診までの期間は、自覚症状があった人では 24 時間未満と 3 か月以上の両端が真ん中とほぼ同じ厚さ（0.958）で、なかった人では真ん中に集まった（0.350）。5 つの年齢階級すべてと、14 の章のうち 13 で同じ向きだった。

分けているものは一つ——自覚症状があったか、なかったか。

「受診までにどれくらいかかったか」と聞いたら、**一つの平均の話か、短い側と長い側の両方に広がった分布の話かを、一緒に確かめる。**

データと再現

データ	受療行動調査 令和5年 基本集計 第16表・第18表、関連集計 第16表・第18表（厚生労働省・e-Stat）（2026 年 9 月 26 日に取得）
利用条件	e-Stat は政府標準利用規約（第2.0版）に従う。本稿の比は、これを加工して作成したもので、国が作成した数ではない
範囲	日本・一般病院の外来患者（診察・治療・検査などを受けるため来院した人）・2023 年
検算	`検算/M088.py`（`--zu` で図も書く）。本文の数字はすべて `検算/M088_output.txt` から取った
生データ	`data/` に取得したファイルと `SOURCES.md`（URL・取得日・SHA-256・利用条件・定義と計算の置き方）
図	`図/M088_zu1`・`図/M088_zu2`（png・svg・英語版）

参考文献

- 厚生労働省. 受療行動調査 令和5年 基本集計 第16表・第18表、関連集計 第16表・第18表. e-Stat（2026年9月26日に利用）. https://www.e-stat.go.jp/
- 山岸勇輝 (2026).「3 時間待ちの 3 分診療」は 2014 年の外来患者の 0.3 % で、3 時間以上待った 1.9 % と診察 3 分未満の 16.3 % を掛けた 0.3097 % と丸めの幅の中で区別がつかない——病院の種類の間では向きが逆で、2023 年は 1 時間以上待つ割合が高い種類ほど診察 5 分未満の割合が低く、5 つの種類で順位がちょうど逆になる [M085]. Zenodo（未公開）.